No.３０
平成２６年１２月２６日（金）
発行　多治見市教育研究所
URL　http://school.city.taijmi.lg.jp/kyoiku/
本誌は、多治見市教育研究所ホームページ上でもご覧いただけます。

巻頭言

プロフェッショナル・教師の流儀

東濃教育事務所長　名取　康夫

先日、ＮＨＫの「プロフェッショナル・仕事の流儀」という番組で、愛知県の桜花学園高等学校バスケットボール部監督の井上眞一さんが紹介されていました。毎年選手が入れ代わる、高校スポーツの世界では、チームが強さを維持し続けることは非常に難しいそうです。井上さんは、その中で、監督として２９年間で５６回の全国優勝を成し遂げ、驚異的な強さを維持し続けている監督です。その指導方法は、基本の徹底と、常に本番の試合を想定して行う練習などです。

しかし、井上さんが最も心を砕いてきたのは、チームを勝利に導くための指導ではなく、「バスケットボールが好きで、上達したいとやってきた選手を、１人たりとも脱落させないこと」だと語っています。事実、井上さんが監督に就任して以来２９年間、特殊な事情を除けば、退部した生徒は出ていないそうです。

最初は、学生時代、自分もバスケットボールに夢中になり、教員になってバスケットボール部の顧問をしていたこともあり、何となく番組を見ていましたが、この「最も心を砕いてきたのは、１人たりとも脱落させないこと」という言葉に、教員として強く心を動かされました。

かつて、私がめざしていた授業は、「仲間と練り合い高まり合う授業」でした。そのために、自分の授業で、子どもたちが多くの挙手発言をし、話し合いが活発になった時、とても充実感を感じていました。１７年前、へき地中堅派遣教員として神坂小学校に赴任した時もそのような授業をめざしていろいろと工夫をしていました。しかし、研究授業の後の研究会で、ある先生から、子どもの具体的な様子をもとに、「授業は盛り上がったみたいだけど、Ａさんは、最後までよく分かっていなかったよ。」と指摘を受け、最も大切なことに意識が十分に行き届いていなかったと、とても反省したことを思い起こしました。

それ以来、授業観が変わり、「どの子も分かっているか、できているか」を最も意識するようになりました。その結果、なかなか思うようにはいかないものの、以前より授業に充実感を感じられるようになった気がします。

４月以来、多くの学校を訪問させていただいています。教師の意識が一人一人の子どもに行き届き、どの子も真剣に学習に向かっている時、本当によい授業だなあと感じます。中には、国語の作文の授業で、教師も子どもたちも一言も話はしませんが、どの子も集中して鉛筆を動かしている様子に感動したこともあります。そのような授業には、どの子も学習に向かえるように発問を精選したり、できていない子には、必ず個別に指導したり、仲間と関わらせたりして、精一杯の対応をする教師の姿があります。

「１人たりとも分からないままにしない」という気構えを持つことが、どの子も生き生きと取り組み、確実な力を付けるための授業の出発点であり、「プロフェッショナル・教師」の流儀なのだと思います。

豊かな心と体を育む～一人一人の発達の特性を理解し、共に育ち合う姿をめざして～

多治見市立精華小学校附属幼稚園

１０月３０日（木）に、東濃地区幼稚園教育研究会及び多治見市教育委員会指定、研究発表会を開催しました。本園では、昨年度より多治見市のインクルーシブ教育推進プランを受けて、幼稚園ではどのようなことができるのかを探り研究を進めてきた。

成果と課題について以下のように報告する。

（成果○　課題▲）

研究内容１　発達を踏まえた幼児理解

① 子どもの内部を読み取るためのエピソード記録と分析
② 発達の特性を踏まえた幼児理解
③ 情報の共有

○ マイナス面や気になる行動にとらわれがちであったが、まずは子どもの興味のある遊びに着眼し、よさを生かした見方ができるようになった。
▲ 子どものサインを見逃さないよう、常に子どもの言動、表情、背景を記録し、幼児理解につなげる。また、職員が共有できる保育記録の工夫を行っていく。

研究内容２　個のニーズを捉えた環境の構成

① 実態に合わせた意図的な環境の構成
② 季節やタイミングを捉えた環境の構成の工夫
③ 家庭や地域、関係機関との連携
④ 温かい人間関係を築くための環境の構成

○ 限られた環境を生かすことや環境の構成を個のニーズに合わせて柔軟に変化させることができるようになってきた。
▲ 生活や遊びを分かり易くする手立ては視覚的なものばかりではない。さらに個のニーズを見極めたユニバーサルデザインが必要である。

研究内容３　個と集団を支える指導援助

① 子どもの育ちを見通した意図的な援助
② 個と学級の相互の育ちを意識した援助
③ 異年齢や子ども同士のかかわりを意図的に活用した援助

○ 個だけでなく周りの子の育ちをみることで指導の発想を転換することができた。
▲ まずは個と個をつなぐための細やかな指導援助の方法とその積み重ねが今後の課題である。

研究発表会当日の『学級活動』を振り返って

（【　】は、ねがい）

3歳児…【自分の思いを表しながら遊べる子】

着目児Ａさんは参会者の多さに圧倒され、しばらく保育室に入ることができなかった。気持ちの安定を図りたい場面であったが、学級のみんなで誘うという行動をとったため逆に威圧感をもたせてしまった。しかし、最後は、みんな入室し、笑顔で帰っていけたことはよかった。

4歳児…【思いを伝え合いながら遊べる子】

ペアで始まった運動遊びから気持ちを伝え合う姿をねらった。３人５人と子どもの輪は増えてきたことはよかったが、活動のつなぎ方や組み立て方の工夫の難しさがあった。今後、子ども同士をつなぐ声掛けや子ども同士が考える場をつくるなど、主体的な活動にするための保育の在り方を探っていきたい。

5歳児…【互いのよさを認め合いながら遊べる子】

参会者をお客さんに迎えるという設定でお店屋さんごっこに取り組んだ。この活動の工夫点は、自己肯定感が低い子が自信をもって活動できるため、売る役もあり、品物を作る役もいるという環境であった。しかし、それだけに一人一人の活動を認めたり、広めたりする難しさもあった。今後、環境の再構成、振り返りから次につなげる方法を工夫していきたい。

～全体を通して～

要支援児が、好きな活動を通して参加できる場を伺いながら、保育者が同じ願いをもち、連携して保育を進めることができた。

文部科学省指定　教育研究開発学校（小中連携・外国語教育）公表会

多治見市立笠原小学校・笠原中学校

笠原小学校・中学校では、これまで１２年間、文部科学省指定教育研究開発学校として、研究を進めてきた。研究の中心である小中連携について、以下のとおり報告する。

【研究主題】
生き生きとコミュニケーションを図る児童生徒を育てる指導の工夫
～「笠原型コンテント・ベイスト」の手法を中心とした効果的な小中連携の在り方～

１．問題解決的な活動により「聞く・話す・読む・書く」必然を生み出す場面設定
２．他教科・領域の既習内容を生かした題材
３．伝え合うねうちの高い内容
　ア．自分の意思や考え
　イ．仲間がもっていない情報、オリジナルな情報
　ウ．他教科・領域の理解を広めたり深めたりすることのできる情報

【研究内容１】
目標及び段階表の作成

身に付けさせたい「態度」と「力」を、「どこまで」高めるのかを明らかにするために、「各学年の目標」「小学校におけるコミュニケーション能力の素地の段階表」「中学校におけるコミュニケーション能力の基礎の段階表」を作成した。作成に当たり、小学校・中学校・高等学校の学習指導要領、国立教育政策研究所が作成した「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」、岐阜県教育委員会が作成した「各領域の指導事項の具体例及び評価規準 65 例」を参考にした。

【研究内容２】
「笠原型コンテント・ベイスト」の手法を用いた指導方法

児童生徒が生き生きとコミュニケーションを図ることができるよう「笠原型コンテント・ベイスト」の手法を用いて指導を行った。「笠原型コンテント・ベイスト」とは、伝え合う内容を重視し、問題解決的な活動により、伝え合う必然を生み出す指導方法のことで、本校独自に開発した。１２年に渡る実践を通して、その要件を見直し、現在では次の３点を大切にしている。

【研究内容３】
小中兼務教員の活用

小中兼務教員が、小学校高学年、中学校第１学年の指導を行っている。小学校では、学級担任・ALT とともに指導を行い、言いたいことはあるが、英語が話せずに困っている児童のサポートをする。中学校では、小中兼務教員が中心となり、中学校英語科教員とともに指導を行う。小学校で共に学習した経験があり、困ったときに助けてくれたという安心感から、生徒の指導者への不安感を軽減することができる。また、実際に小学校外国語活動で使用した教材・教具、活動方法を取り入れて中学校の授業を行うことが容易である。

《成果と課題》

○　目標及び段階表を作成することで、評価規準を明確にして指導に当たることができた。
○　「笠原型コンテント・ベイスト」の手法を用いて伝え合う内容を重視した指導を行うことで、生き生きとコミュニケーションを図る児童生徒を育成することができた。
▲　小学校においては、文字に慣れ親しむ指導について、中学校においては正確に言語を運用するための指導について、指導計画・指導方法を検討していく。

「豊かにかかわりながら、誇りと思いやりをもって生きる児童の育成」

多治見市立小泉小学校

小泉小学校は、「岐阜県道徳教育振興会議実践協力校」、「道徳教育パワーアップ実践校」として道徳教育振興会議・文部科学省・岐阜県教育委員会より指定を受け、２カ年にわたり道徳教育の充実に向けた研究に取り組んできた。その成果と課題について報告する。

１ 成果

(1)「道徳の時間における指導方法の改善」

① 「主題構成表」を活用し、実態と要因を明確にして、心情をもとにねらいを設定することで、ねらいにせまる話し合いにつながった。

② 「人間理解」「価値理解」を考えさせる発問等発問のねらいの明確化と精選により、ねらいとする道徳的価値にせまる話し合いができ、自分の考えを語ったり、仲間の考えと比較したりすることができた。

③ 役割演技の、演じる側、見る側に「心情」を意識した視点を明示することで、共感的な見方や「他者理解」が深まった。

④ 後段・終末において、個々の意識の変容や新たな自分の気付きを認めたり、これまでの自分の道徳的な実践を価値付けたりすることで、個々の自尊感情を高めることができた。

(2)「道徳の時間と他の教育活動との関連を図った指導の充実」

① 全員が学級の「じまんづくり」に取り組み、仲間とかかわり「思いやり」「協力」のよさに気付き、共通の達成感をもつことでクラスに誇りをもつことができた。

② 道徳の時間と学級目標を関連付けた声かけを継続することで、学んだことを積極的に生活に生かそうとする児童が増えた。

③ 「道徳コーナー」や「掲示物」「よいこと見つけ」を道徳の内容項目ごとで分類し、色分けをして掲示することで、道徳の時間と日常生活を結び付けることができた。また、「行為」だけでなく、「心情」のよさにも気付くができるようになった。

(3)「学校・家庭・地域社会が連携した道徳的実践の充実」

① 「別葉１」「別葉２」や、「行事と道徳の時間との関連を明らかにした表」を作成することで、全教育活動で道徳教育を行う意識を高めることができた。

② 児童会が中心となった「あいさつ広め隊」や「花さかせ隊」等のボランティア活動を通して、思いやりの心が育ち、地域や仲間と進んでかかわろうとする児童が増えた。

③ 地域の方とふれあう活動の「道徳的価値」を明確にすることで、地域に対する誇りや尊敬や感謝の思いをもつことができた。

④ 参観日に全クラスが道徳の授業を公開することで、道徳の必要性について、保護者に理解してもらうことができた。

⑤ PTA を巻き込み、PTA 主催のボランティア活動を活発にしたことで、「一家庭一ボランティア」や、道徳教育に対する保護者の意識が高まった。

これらの活動により、児童一人一人が仲間や家庭や地域とかかわり合うことができた。かかわり合いを通して、自分の思いを語り、周りからの言葉に耳を傾け、お互いを思いやる気持ちが深まってきている。

また、自分を認められたり、自分の成長を実感したりすることで、少しずつ自信をもつことができようになっている。

２ 課題

① 個々の児童の「行為」や「要因」について具体的に分析し、補充・深化・統合を図り、計画的、発展的な指導を行う。

② 本時の道徳の時間が「要」となるべく補充・進化・統合のどれに当たるかを明確にし、「要」として機能させていく必要がある。

③ 自己の生き方について考えを深めるために、本時のねらいを明確にしたうえで、発問や問い返しをさらに精選する必要がある。

④ 他の教科や行事の特性を考慮し、道徳の時間とねらいの関連を図ったり、時期を考慮したりすることで児童の道徳的価値の自覚を深める効果を一層高めていく必要がある。

⑤ 家庭や地域との関わりについて、活動することが目的とならないように、活動するねらいや目的を道徳的価値の視点に基づいてより明確にする必要がある。

「できた」「わかった」が実感できる授業づくり

～生徒が自分の考えをもち、仲間の中で、基礎学力を身に付けることができる指導のあり方～

多治見市立北陵中学校

１０月２９日に、２年間の指定を受けた多治見市教育課題研究発表会を終えることができました。

研究会において、参加された先生方から教えていただいたことを踏まえ、成果と課題を報告する。（○は成果、▲は課題を表している。）

【研究内容Ⅰ】

生徒が意欲をもって取り組む導入の工夫

○ 保健体育科では、ビデオを活用することで、本時に目指す姿がイメージしやすくなった。

○ 技術・家庭科では、目指す作品（＝LED が１２個全て点灯する基板）を示すことで、生徒が課題達成の意欲をもって作業に取りかかることができた。

○ 音楽科では、授業のはじめの合唱を録音して聴いたことにより「曲の強弱をもっとつけたい」と本時の課題を自らつかむことができた。

▲ どの教科でも更に、必然性のある課題設定をしていく必要がある。

▲ 課題に結び付くような導入資料（本時のねらいに結びつく意見がすぐに出るような生徒にとってわかりやすい具体物）を精選していくことが大切である。

【研究内容Ⅱ】

生徒が課題解決に向かうための指導・援助の工夫

○ 国語科では、個人追究の場で、本文の中の重要語句に着目させることで、すぐに線を引き始める姿や自分の考えをきちんと書く姿が見られた。

○ 社会科では、追究時間に机間指導を丁寧に行うことで、「自分の考えをもつ」という点において、生徒全員が達成できていた。

○ 理科では、交流時に「キーワード」を使用することで、生徒たちの考察や交流の視点が明らかになり、考察しやすくなった。

○ 美術科では、鑑賞に素材の体験活動を取り入れたことで、生徒が作者の思いを実感でき、効果的であった。

○ 数学科では、「できた」「わかった」を実感させるために、仲間同士で教え合う指導を継続的に行ってきたことで、個人追究の場で分からないところを教え合う姿が多く見られた。

○ 英語科では、「Sharing Time」で教師が押さえたこととモデル生徒を出したことで、苦手な生徒も、最後には"Do you know~?"（本時使ってほしい表現）を使うことができていた。

○ 特別支援学級の授業では、具体物を並べ、店員役の対応も現場と同じようであり、生徒が意欲的に学ぶことができる環境が整えられていた。

▲ どの教科でも、教師の出場や発問の精選などの指導援助の工夫を更に行っていきたい。

▲ どの教科でも、聞き方・話し方の指導や生徒同士の意見交流のさせ方の工夫を更にしていく必要がある。

【研究内容Ⅲ】

生徒が充実感をもつことができる授業終末の工夫

○ 保健体育科では、ゲーム記録から三段攻撃率を計算させたことで、数値が上がったグループから「よっしゃあ。」と喜ぶ声があがっていた。

○ 技術・家庭科では、作品の点検をグループで行う時「やったー。」「できた。」「よかった。」という歓声を聞くことができた。

▲ 評価活動を充実させていくために、まとめを書いた後に良いまとめ方を交流させたい。また、数学科や理科での評価問題を工夫していく必要がある。

▲ どの教科でも、生徒の振り返りが課題とずれないようにするための授業終末の工夫を更にしていく必要がある。

先生方からのご意見を参考にし、今後、生徒たちに力を付けるための継続的な指導や授業改善を行って参りたいと思います。ありがとうございました。

シリーズ連載

ＳＳＷ（スクールソーシャルワーカー）の仕事　③

スクールソーシャルワーカーが十分に力を発揮するためには、窓口となる学校の担当者を明確にし、効果的な活用のためのコーディネーター役として、相互の信頼関係を築いていくことが大切です。

１　学校における活用例

①個別への対応

・ 児童生徒及び保護者との個別相談、家庭訪問等
・ 対応の難しい個別事例に関する相談

②ケース会議等への参加

・ いじめ対策委員会、不登校対策委員会、事例検討会等
・ 教育相談体制の改善、個別事例への対応、チーム支援のプランニング等

③教職員、保護者、地域住民等に対する研修会

２　市町村教育委員会における活用例

①サポートチーム会議

・ 対応の難しい事例に対するチーム支援のプランニング等
・ 個別事例検討会

②教育委員会が関与する教育相談体制づくりに必要な事業等

３　留意事項

・ １日（１回）の勤務時間は原則６時間
（目的や実情により、勤務時間を調整する場合は、必ず教育事務所担当者と協議を行う）
・ １日（１回）の勤務の中で場所を移動する場合は、移動手段や移動距離を勤務実績簿に記入する（移動は最小限にとどめる）

※　ＳＳＷ活用の手引き（県教委）より抜粋

ＳＳＷより

ＳＳＷの活動内容

問題の背景にあるもの（子どもたちの教育の機会や権利を奪う要因）の改善に向けた取り組みを行っています。

＜具体事例＞

登校しぶり

背景：未就園　保護者の養育能力の低下
体調不良が続く　学費滞納

○背景にある問題を整理し、関係者でケース会議を行い、対応を検討し役割を確認。

・本人の対応…学校
・家庭支援　…子ども支援課
・体調不良　…病院（ワーカー）
・母の対応（社会資源の紹介）…ＳＳＷ

（連絡調整）

○ＳＳＷとして、保護者（本人）の代弁者であり、関係機関の連絡や調整等を実施。

ＳＳＷの思い

「だれ？」学校に行くと子ども達によくこう問いかけられます。子ども達でなくとも、ＳＳＷと言ってすぐにどんな仕事をする人か理解できる人は少ないのではないでしょうか。ＳＳＷを配置している市町村はまだまだ少なく、一般的にもあまり知られた存在ではないと思います。

「子ども達が、より良い学校生活を送るための環境を整える仕事。」一言でいうとこんな仕事だと私達は理解しています。悩みながらの毎日ですが、今大切にしていることは、様々な事情を抱える子ども達や保護者の心のできるだけ近いところに寄り添うということです。そこから、その子が持っている本来の力を発揮できるようするためには、どのような人や機関とつながって環境を整えていけばいいのか、どんな支援が必要なのかを考えていくようにしています。

（ＳＳＷ　：　丸山　綾　・　長谷川京子）

今後もよろしくお願いします！

平成２６年度　多治見市新規採用教員の紹介

教師として歩みはじめて⑥

「いじめをなくすために」

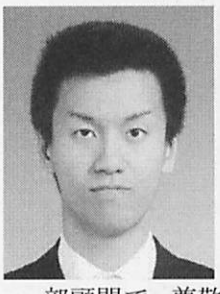
南ヶ丘中学校　安藤　綾野

私は、いじめをなくすために教師になりました。私が教師になって、今あるいじめを少しずつなくせば、いじめはなくなると信じています。

私はこの目標に向けて毎日心がけていることがあります。１つ目は、笑顔を絶やさないことです。生徒が安心できる空間には必ず笑顔があるはずです。だから私が毎日笑顔でいて、明るく、生徒全員にとって安心できる学級をつくっています。２つ目は、生徒一人一人と会話をすることです。生徒のちょっとした変化を見逃さずに支えています。そして学級にも会話を広め、話しやすい先生や話しやすい仲間がいる温かい信頼関係を築いています。３つ目は、よいことは大きく褒めてあげることです。そして人のよさに気付ける生徒を増やし認め合う仲間関係を築いています。

最後に私が生徒のために笑顔でいられるのはたくさんの方に支えられているからです。毎日感謝の気持ちを忘れず、「成長」という形で恩返しをしていきたいです。

「見て・判断して・行動する」



南ヶ丘中学校　鈴浦　尚弥

「鈴浦先生！」４月当初は生徒や同僚の先生方にこう呼ばれるたびにドキッとしていましたが、ようやく慣れてきました。教師として１歩踏み出せたのかなと感じています。

タイトルは所属するサッカー部顧問で、尊敬する大先輩の先生のことばです。「生徒に付く・どうすればその生徒に力が付くか考える・その考えを行動に移す」ということをとてもシンプルに教えて頂きました。トレーニングの時に耳にしたこのことばを、私は学級経営・教科指導の軸として据えています。

このように、厳しくもあたたかく指導してくださる同僚の先生方に囲まれて、生徒と同じく「勉強の毎日」を送っています。担任するクラスの生徒とは年齢が近い分、距離感の取り方に苦労するときもあり、失敗もたくさんしますが、願いをもってぶつかっていけば応えてくれるということも実感しています。これからも、「見て・判断して・行動する」ことを通して、生徒のために力を付けていきます。

「生徒と共に歩む」

北陵中学校　常冨　真弘

赴任してから８ヶ月がたちました。この８ヶ月間は、元気な生徒に囲まれながら、あっという間に過ぎてしまいました。しかし、その一瞬のような間にも、多くの生徒と接し、様々なことを学んできました。時には、生徒との接し方が分からず、悩む時もありました。しかし、いつも温かく見守ってくださる周りの先生方に支えられ、楽しく過ごすことができました。

今、私が生徒と接する中で心がけていることは、「よいとこみつけ」です。生徒と接する中で、どの生徒にもその子なりの良さがあると実感しています。私は、その良さをできる限り見つけ、本人に「褒める」という形で伝えるよう努力しています。褒められることで自信を持ち、授業や活動に意欲的に参加する生徒の姿を見ると、大変うれしく思います。

これからも、見守ってくださる先生方への感謝の気持ちを忘れず、生徒とよくふれあい、生徒の良さを見つけられる教員を目指して努力していきたいと思います。

「学校生活」

北陵中学校　大島　紳三朗

中学生時代の自分はどんな生徒で、どのように過ごしていたのだろう。生徒は先生のどんな言葉で心が動き、どんな事が心に残っているのだろう。北陵中学校の生徒とふれあう中でいつもそんな事を考えています。日々の生活で生徒になかなか伝わらない事をどう伝えるのがいいのかを、生徒の立場になって考え、どう言われると心に落ちるのかと考えながら毎日を過ごしています。

転職し、少し遅い教員生活が始まり、今までと違った仕事で戸惑いも確かにあります。しかし教壇に立ち、日々生徒とふれあうこの仕事に充実感を感じています。また、多くのご迷惑をお掛けしている周りの先生方のおかげで、自分を見失わずに今の教員生活を送れていることに感謝しています。

どんな教員生活を送るのか、教師としての終わりをどんな風に迎えるのか、今からワクワクしていますが、無限の可能性が自分にもあると信じて今を全力で過ごしていこうと思います。

平成２６年度　多治見市新規採用教員の紹介

教師として歩みはじめて⑦

「たくさんの人に支えられて」

南姫中学校　郷　友華子

中学生の頃からの夢であった教師になることができ、８ヶ月が過ぎようとしています。４月当初は初めての学級担任、初めての授業、初めての部活指導など初めての事づくしで緊張と不安にあふれた毎日でした。しかし「先生！」と声をかけてくれる生徒の姿や、授業に懸命に取り組む生徒の姿を見ていると、「教師としてこの子たちの力になりたい」という使命感が自然とあふれてきました。今でも不安な事はありますが、それより何倍もの喜びや楽しさに満たされた毎日を送っています。これも姫中の温かな生徒たちのおかげだと思います。また生徒だけでなく周りの先生方や地域の方々にも日々支えられています。特に秋に行われた大運動会では学校内だけでなく、地域の方々との繋がりも感じる事が出来ました。

今日まで自分が精一杯頑張ってこられたのはたくさんの人たちの支えがあったからこそです。これからも感謝の気持ちを忘れずに、生徒とともに成長していきたいと思います。

「教師としての自分」

南姫中学校　中澤　良太

働き始めてから、自分がどんな人間なのかということをよく考えるようになりました。

生徒と会話をしていると、一人ひとりが様々な考えや想いをもっていることに気づきます。快活な生徒もいれば、おとなしい生徒もいます。その中で、自分がどんな人間であり、生徒にとってどのような存在であればいいのかを考え、生活を送ってきました。生徒に他人を思いやる気持ちをもたせたいのであれば、教師は率先して他人の力にならなければならなりません。何事にも挑戦する気持ちをもたせたいのであれば、教師自らが挑戦していかなければなりません。自分の行動が生徒の姿を変えていくということを、これまでの生活で強く感じました。

また、生徒のことを常に考える先生方の姿が、教師としての在り方を教えてくれています。先生方の姿を見て、私も生徒と精一杯向き合おうと思えます。生徒と先生方の姿を見、今後も自分の在り方を考え、成長していきたいです。

「生徒とともに成長していく」

小泉中学校　加藤　哲也

長い講師経験を経て、今年度より正規採用されました。非常勤講師から始まり、やっとここまでこれたという気持ちでいっぱいです。また、ここが第２のスタート地点として気持ちを新たに取り組んでいきます。

教師という仕事につけて本当に幸せです。毎日生徒たちとともに学び、成長していけるからです。生徒たちの元気な声や笑顔で元気になることができます。そんな素晴らしい生徒たちの力に少しでもなれるように自分自身も日々勉強していきたいです。今私は、「授業後に１時間の流れがわかる板書」「どのような力をつけたいのかを明確にする」この２つのことを意識して取り組んでいます。毎日の小さな目標を達成しながら少しずつステップアップしていきたいです。また、自分が努力する姿を見せることで、頑張れば力がついていくということを伝えたいです。

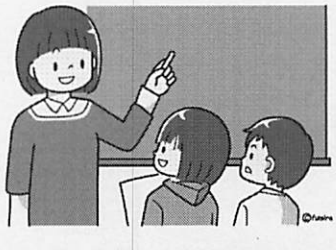
私の教師としての生活は始まったばかりで、毎日が勉強です。周りの先生方の支えがあってこその今の自分があると思います。そんな感謝の気持ちを持ちながら、自分のできることを精一杯やりたいです。そして、生徒から信頼されるような教師を目指します。

「『教師になる』ということ」

笠原中学校　佐藤　希帆

中学校の頃から教師になりたいと思っていました。

４月からは、教えられる立場から教える立場へと生活が激変しました。地元を離れるのも初めてで不安ばかりの始まりでした。

担任を持って自分が学生の時、先生がいかに大変だったかがよくわかりました。

保護者との関係も予期せぬことの連続でした。新任だから頑張ってと励ましていただける方、新任だからと心配される方、いろいろあります。幸い担任を持っている１年生の他の先生は相談しやすく、学年主任の先生も親身になって相談に乗っていただけます。家族や友人、先輩の先生方に支えられながら社会人として、教師としての力をしっかりとつけていきたいと思います。